

「自我体験」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

昨日、職場の校内研究会で、哲学者の永井 均先生の講演があった。著名な哲学者の一人のお話を身近に聞ける、大変貴重な機会だった。冒頭で永井先生は、「自分は幼少時に、なぜ”ぼくはぼくなのか”とふと思った。その後も何度かそう思った・・・」という話をされた。私は、永井先生が自分とまったく同じことを考えていたのだと思い、大いに共感した。私も小学校低学年の時に、ふとこう思ったのだ。

いったいどんな仕組みで、ぼくの体の中に、ぼくがちゃんと入っているんだろう？

実はこれらは「なぜ私は私なのか(Why am I me?)」という、哲学分野の重要な問題として、古くから位置づけられている。永井先生や私自身が幼少期に感じたこと(心理状態)は、一般に「自我体験(Ego experience)」と呼ばれている。実は、人が成長する過程で、約1割の人が体験するという調査結果もある。

この問いについては、これまでに著名な哲学者(例えばトマス・ネーゲル)から、さまざまな解の例が示されている。しかし、根本的に解決されていない「難問」である。永井先生は著書の中で、以下のように述べている。

無限の昔から、世界は〈私〉なしに存続してきた。わずか数十年(長くてせいぜい百年)の例外期間を過ぎて、世界はまた〈私〉なしに存続してゆくであろう。数十億の生きた人間、他の天体にも存在するであろう無数の自己意識的な生き物のうち、〈私〉であるという特殊な、例外的なあり方をした生き物が存在している。その例外的な期間とは何であり、その例外的なあり方とは何であるのか。それは神秘としか言いようがない。それを説明する言葉はありえない。

また後年、「おそらくこの問いには答えがない。端的にそうであること——これ以外に答えがないように思えるのだ。」とも述べている。永井先生は、この「根本的な問い」に答えがないという現状では「哲学そのものは始まってすらいない」とも考えている。

つまり「ただ、そうなっているとしか思えない」ということなのだ。私も「今のところ」これが最良の解だと思う。「今のところ」と書いたのは、「人間の意識」の研究が急速に進んでいるからだ。将来「意識は時空は超越し得る“何ものか”である」ことが証明されれば、この問題は科学的に解決するかも知れない。“何ものか”が、有形の素粒子の類か、無形のエネルギーの類か、それはわからない。



私の場合、子どもの頃、ふと思っただけではない。その後この問いはさまざまな派生した問いとなって、現在につながっている。「なぜ、自分は日本人として生まれたのか」「なぜ、自分はキリンとして生まれなかったのか」「なぜ、自分は地球という惑星に存在しているのか」「なぜ、ある朝起きた時、自分とちえちゃん(小学校の時の友達)が逆になっていないのか」・・・これらの「問い」は、その後45年間解決していない。一番最近思ったのは「なぜ、自分は大橋巨泉ではなかったのか」